

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク ㉔

* 龍とカルヴィーノ(3) *

堤 康徳

カルヴィーノの『宿命の交わる城』(*Il castello dei destini incrociati*, 1973)には、タロットカードの配列によってつむぎだされた一連の物語が収められている。カルヴィーノ自身の言葉によれば、タロットカードが、「組み合わせによる語りの装置」(*macchina narrativa combinatoria*)として使われたのだった。この小説は、「宿命の交わる城」(初版は1969年に刊行された)と「宿命の交わる酒場」(*La taverna dei destini incrociati*)の二部から成る。深い森にある城、あるいは闇に閉ざされた酒場に旅人たちが集まり、食事をともにする。彼ら旅人は、騎士であれ貴婦人であれ、いずれも声と言葉を失っており、自らの物語を、テーブルにタロットを並べることで語り出すのである。

とりわけイタリアとフランスで普及しているタロットは、全部で78枚(通常のトランプは52枚)のカードから成る。聖杯(ハート)、貨幣(ダイヤ)、杖(クラブ)、剣(スペード)の4種類の組札ごとに、10枚の数札と4枚の絵札(兵士、騎士、女王、王)がある。このほかに、愚者、女教皇、隠者、悪魔、世界といった、タロット独自の切札が22枚ある。

タロットは今日まで広くかつ伝統的に占いの道具として用いられ、複雑きわまりない秘教術、占星術、降神術、錬金術などと密接な関係を持ってきた。けれども、本書には、その痕跡はほとんど認められない。むしろ逆に、最も単純で直接的なカードの読み取り方が、ここでは問題になってくる(イタロ・カルヴィーノ「日本の読者のために」『宿命の交わる城』河島英昭訳、講談社、1991年、pp. 189-190)。

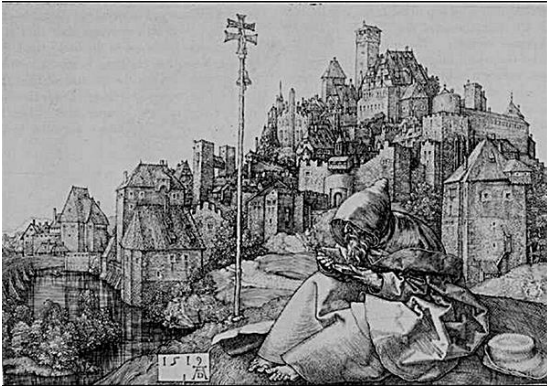
カルヴィーノによれば、本書第一部「宿命の交わる城」の中心軸にあたる挿話は、アリオストの『狂乱のオルランド』からヒントを得たという。第二部「宿命の交わる酒場」の物語には、『ハムレット』、『マクベス』などのシェイクスピアの作品や、『オイディプース』、『ファウスト』、『パルジファル』などの神話や伝説が背景にあるというが、貨幣、剣、聖杯、隠者、奇術師、女教皇、吊し人などのカードから生み出されるカルヴィーノの物語は、どれも終末の気配を色濃く漂わせているように私には思えてならない。

本稿で注目したいのは、第二部「宿命の交わる酒場」の「私自身の物語を求めて」と題された一章である。このなかでとりわけ興味深いのは、タロットの代わりに実在の絵画を用いて、カルヴィーノが独自の図像学を展開しつつ、自らを語り、創作の鍵まで打ち明けているとさえ思われる一節である。

タロットを並べてそこから物語を作り出す手品を、私は美術館の絵画を用いてもできるかもしれない。たとえば、「隠者」のカードの代わりに、聖ヒエロニムス(San Girolamo)の絵を、「剣の騎士」のカードの代わりに聖ゲオルギウス(San Giorgio)の絵を置くのである(Italo Calvino, *Il Castello dei destini incrociati*, Milano, Mondadori, 2014, p. 107)。

このふたりの聖者の絵に、カルヴィーノはとくに魅了されていた。四大教父のひとりで、聖書をラテン語に翻訳した学者として知られるヒエロニムスは、絵画では、書斎で一心に机に向かう姿、あ

るいは荒野で本を読む姿が一般的だが、いずれの場合も、獅子とともに描かれることが多い。これは、獅子の足に刺さった棘を聖人が抜いてから、獅子が聖人に従うようになったという伝説にちなむ。カルヴィーノがヒエロニムスの絵に魅かれるのは、聖人のなかに自己を認めるからでも、獅子のなかに自己を認めるからでもなく、「一体となった両者のなかに、一体となった人物・事物・風景のなかに」自らを認めるからだという。また、「風景のなかで、読み書きの道具が、岩・草・トカゲのあいだに置かれ、鉱物・植物・動物の連続性の産物・道具となっている」からである。ここには、これまでもこの連載を通じて紹介してきた、カルヴィーノの自然と事物をめぐる詩学が端的に現れていると思われる。



【デューラー「聖アントニウス」】

次にカルヴィーノは、絵画に描かれた隠者たちが、必ずしも砂漠やジャングルのなかにではなく、都市の近くに描かれていることに注目する。「隠者たちの絵は、ほとんどつねに、ひとつの都市を背景にもつ」と述べたあとで、聖アントニウスの背景いっぱい、四角い塔やとがった屋根の林立する都市を描いたデューラーの版画や、クルミの木蔭でつば広の帽子をかぶり読書に夢中のヒエロニムスと、背を向けてあたりを見回す獅子の頭上に町を描いたレンブラントの版画を例に挙げる。そして、隠者の真価について次のように述べるのである。

夜になると隠者たちは、窓辺に灯りがともるのを見る。風が祭の音楽を次々に運んでくる。彼らは望みさえすれば、十五分ほどで人々のなかに

戻ることもできるだろう。隠者の力は、都市からどれだけ遠く離れられるかによって測られるのではない。都市をつねに視界に入れたまま、どれだけ短い距離で都市と断絶できるかによって測られるのだ(Ibid, p. 108)。

隠者を自認していた当時のカルヴィーノが、1967年から1980年まで、イタリアのはるか遠くではなく、隣国フランスの首都に居を定めたこと、また、『木のぼり男爵』の樹上に住む主人公が、地上数メートルの距離を保ちながら社会参加の可能性を追求したことが、ここであらためて思い出されるだろう。

書齋にこもり孤独な作業にとりくむ作家が、同じく書齋でペンを手にして書物を広げる、聖ヒエロニムスや聖アウグスティヌスの姿と自己を重ね合わせ、親近感を抱くのは、むしろ当然かもしれない。

では、聖ゲオルギウスはどうだろうか？ 聖ヒエロニムスにとって獅子がそうであるように、龍は聖ゲオルギウスに欠かせない存在である。聖ゲオルギウスは、周知のように、龍退治の伝説をもつ聖人だ。カルヴィーノは、カルパッチョやラッファエッロの描いた聖ゲオルギウスを例に出しながら、この聖人がタロットの「剣の騎士」と同じく、つねに没個性的な顔立ちをしている点に注目する。カルヴィーノは書いている。

いずれにせよ、聖ゲオルギウスは、私たちの目の前でつねに彼の任務を遂行する。つねに甲冑に身を閉ざし、けっして自らをあらわにすることはない。というのは、行動する男にとって、心理学は向いていないから。もしかすると、心理はすべて、怒りをあらわにして身をよじらせる龍の側にあるといえるのかもしれない。敵であり怪物であり敗者である龍は、勝者の英雄がもちたいとは夢にも思わない(あるいは、それがあらわにならないよう用心している)パトス(情念)をもっているのである。ここから、龍こそ心理であると結論づけるまでの道のりは短い。いやむしろ、龍はプシケ(精神)であり、聖ゲオルギウスが立ち向かう彼自身の暗部であり、多くの若い男女を悩ませてきた敵であり、おぞましい他者となる内なる敵なのである(Ibid, p. 111)。

カルパッチョがヴェネツィアのサン・ジョルジョ・デリ・スキアヴォーニ信徒会の壁面に描いた、聖ヒエロニムスと聖ゲオルギウスの連作について、カルヴィーノは大胆な考察を巡らせる。この連作のなかで、馬上の聖人が龍を槍で串刺しにする瞬間をとらえたダイナミックな構図の絵はよく知られている。まるで、未来派のボッチョーニが描いたかのような。この絵のほかにも、聖人が龍を広場に連れ出して公衆の面前で処刑する場面の絵がある。カルヴィーノはこの絵について、龍の脅威から解放され、町じゅうが喜びにわいているはずなのに、誰もが暗い顔をしていると指摘したうえで、その理由をこう説明する。

聖ゲオルギウスの剣が振り上げられた瞬間、私たちは息をのむ。そのときはじめて私たちは理解する。龍は敵・異物・他者であるだけではなく、私たち自身だと。私たちが裁かねばならないのは、私たち自身の一部である、と(Ibid., p. 112)。

さらにカルヴィーノは、カルパッチョの連作において、ふたりの聖人、ヒエロニムスとゲオルギウスの物語が、じつは、「同一人物の、青春・成熟・老い・死と続く生涯を描く唯一の物語」ではないかという見解を述べるにいたる。聖人だけではない。二匹の獣もまた同一だと考えるのだ。

よく見れば、ふたつの物語の共通の要素は、敵の龍であれ、友の獅子であれ、猛獣との関係のなかにある。龍は町に迫り、獅子は孤独をおびやかす。私たちはそれを唯一の動物とみなすことができる。私たちの外側と内側で、公衆の面前および個人の内面において出会う猛獣である。町に住むうえで罪深いのは、猛獣の条件を受け入れて、私たちの子供を彼に差し出すことである。孤独を生きるうえで罪深いのは、自らが平穏だと信じることである。なぜなら、猛獣は、足に刺さった棘のせいでおとなしくしてい

るのだから。物語の英雄は、町のなかで龍の喉に槍を突き刺す者である。また、孤独のなかで、力のみなざる獅子を番人が家の守り神として従える者である。ただし、その野獣としての性質は隠しようもない(Ibid., pp. 112-113)。

問題の人物は、行動と思索の両面において、戦士であると同時に賢者であることができれば、何者でもない。同じく野獣は、都市の日常的虐殺における敵の龍であると同時に、思考の空間における番人の獅子なのである。ふたつの姿を重ね合わせなければ、とらえられないのだ(Ibid., pp. 113)。

聖ヒエロニムスと聖ゲオルギウスの物語には、西洋哲学における、観照的生と活動的生の対置の歴史が反映されていると思われる。龍退治は活動的生の目的である。だが、カルヴィーノの言うように、龍が精神であり、内面の暗部であるなら、それは観照的生の課題でもあるだろう。野生を失っていない獅子は、隠者が孤独に安住することを許さず、その観照的生に緊張をもたらす番人である。孤独にあって叡智の獲得を目指す隠者は、じつは、都市における活動的生をつねに視野に入れている。「戦士であると同時に賢者であること」こそ、パリの隠者、カルヴィーノが理想とする知識人像だったのではないだろうか。



【カルパッチョ「聖ゲオルギウスの勝利」(部分)】

(上智大学講師)

バチカンの秘密

Vatileaks 第二弾『食欲の罪』

深草 真由子

「兄弟たちは、どこにしようが、どこへ行こうが、病身の仲間がどうしても必要とする分でなければ、衣服や書物の購入のため、あるいは労働の対価として、金銭をみずから稼いでも、他人から受け取ってもならず、金銭が与えられることを許してはならない。なぜならわれわれは金銭を所有したり、金銭に石ころ以上の価値を認めたりしてはならないからである(アッシジのフランチェスコ『第一会則』第八章)」。



【アッシジの聖フランチェスコ(ジョット画)】

裕福な家庭に生まれ享樂的な生活を送ったのちに、現世の快樂を断ち切って清貧に身を投じたアッシジのフランチェスコ。その聖人の名にちなんで、アルゼンチン出身の現教皇はフランチェスコ

と名乗っている。庶民的で質素を好み、わかりやすい言葉で説教するフランチェスコは、不安のうずまく国際情勢にあって、カリスマ的なリーダーとしてイタリア人のあいだで信頼を集めている。そのためか、児童虐待や金融犯罪のスキャンダルで揺れたバチカンが、彼のおかげで一新したかのような気になるのだが、やはり現実はそう甘くはないのであった。

今回のスキャンダルは、前教皇ベネディクト十六世の時代に発覚したスキャンダル Vatileaks の「つづき」ということで Vatileaks 2 と呼ばれおり、二冊の著作の出版がその契機となった。『バチカン株式会社』で知られるジャンルイージ・ヌッツィの『十字架の道行き』(Gianluigi Nuzzi, *Via Crucis. Da registrazioni e documenti inediti. La difficile lotta di Papa Francesco per cambiare la Chiesa*, Chiarelettere)と、エミリアーノ・フィッティパルディの『食欲の罪』(Emiliano Fittipaldi, *Avarizia. Le carte che svelano ricchezza, scandali e segreti della Chiesa di Francesco*, Feltrinelli)が、それである。

前回の Vatileaks では、ベネディクト十六世の執事によって機密文書が外部に持ち出された。そこに教皇の側近たちの激しい権力争いが垣間見られ、そうした混乱をコントロールできなくなったことが、ベネディクト十六世の生前退位の理由のひとつだったと考えられている。後を継いだフランチェスコは、世界から非難された金融犯罪の問題に立ち向かうため、バチカンの各組織における不透明な金の流れを徹底的に解明する、COSEA と呼ばれる委員会を新たに設置した。しかし、イタリア人ジャーナリストに機密情報を漏らしていたのが、まさにその COSEA の関係者だったのだから、教皇も驚いたことだろう。その者たちは一体何を目的に情報を流したのだろうか。フランチェスコが進めている「貧しい人々による、貧しい人々のための教会」作りをあと押すためなのか、あるいは脚を引っ張りたいたいのからなのか、それとも私利私欲のためなのか…。

その動機はけっして純真無垢なものではないことを伺わせるプロローグで、フィッティパルディの『食欲の罪』は始まっている。「二人の高位聖職者

が話し始めたのは、給仕がマグロのカルパッチョと赤エビのたたきをサーブしてからすぐのことだった。それまでは二人とも口を開かなかった。白ワインのリストに目を通して料理に合うものを吟味し、くるみ風味のパンをかじり、パリオーリのレストランの庭に挨拶しておくべき顔がないかどうか、退屈そうに周りを見渡していた(p.9)」。ローマでも富裕層の住むパリオーリ地区の、洗練された魚料理を出すレストランで、どうやら贅沢に慣れていそうな聖職者らによって、大量の資料がジャーナリストに手渡される。「本を書きなさい。フランチェスコのためにも。彼は知るべきなのだから(p.9)」。一体、教皇は何を知るべきだというのだろう。



【フィッティパルディ著『貪欲の罪』】

バチカン市国というのは、ムッソリーニ時代に結ばれたラテラノ条約によって誕生した、れっきとした主権国家である。統治者がおり、省庁があり、そこで役人が働いている。国家予算が組まれていて、その主な歳入は博物館の入場料などの観

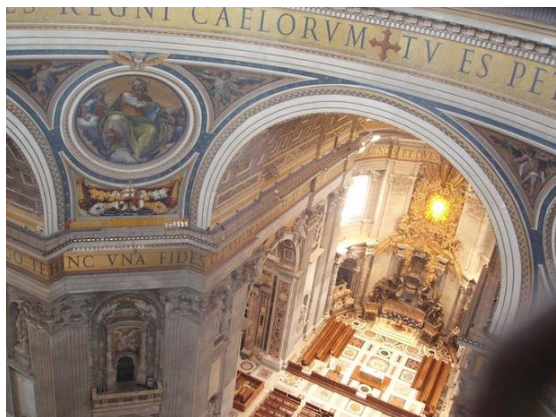
光収入、そして信者から寄せられる「聖ペトロの献金」による。毎年聖ペトロ(サン・ピエトロ)の聖名祝日6月29日に世界中で集められる、総額七、八千万ユーロにもなるその献金は、慈善活動や布教活動のための資金になるとされている。そのはずなのだが、実際は投機にあてられたり、バチカンの省庁や枢機卿の諸経費になったりしていると、フィッティパルディは報告している(pp.37-9)。バチカン市国内では、ワインや高級ブランドの服飾品、タバコ、ガソリン、医薬品などが、ローマ市内で買うより格段に安い。ただしその恩恵にあずかることができるのは、バチカン市国内に住む僧侶とバチカン職員だけなのだが…。しかし明らかにされている売上高から一人当たりの購入額を計算してみると、平均的なバチカン関係者というのは、一日三箱消費するヘビースモーカーで、年間4万キロ以上走るドライバーという現実離れた数字が出てくるのだが、どうしてだろう。縁故や権力にものを言わせて、不当に購入権を得ている者がいるということなのか(pp.75-80)。



【サン・ピエトロ大聖堂の内壁】

キリストの教えにならって生きた信仰の模範となるような人物は、なんらかの奇跡を起こすことにより、福者、聖人として認定されることになっている。列福、列聖には、その人物の生前の功績や著作が専門家によって綿密に調査され、起こしたとされる現象が科学では説明されえない真の奇跡であることが証明され、報告書や資料の解説がラテン語で作成されたのち、バチカンの列聖省にて厳正な審査を経なければならない。長い時間を要する、面倒で困難なプロセスである。『貪欲の

罪』では、この手続きのサポートがビジネスと化していることと、それに携わるエージェントがいかに稼いでいるのかが、具体的な数字とともに報告されている。それにしても、聖人になるのに数十万ユーロも必要だとは...(pp.80-97)。



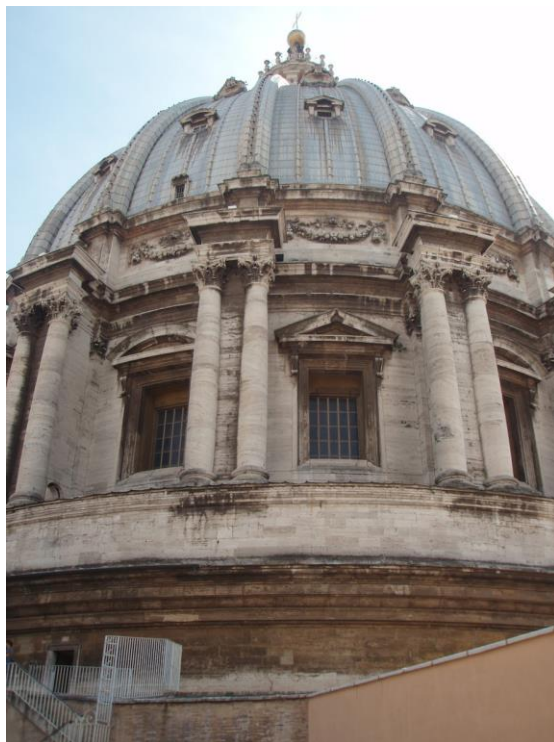
【サン・ピエトロ大聖堂の内陣】

子どもの病気治療や小児病の研究を助成する財団に寄せられた寄付金が、枢機卿の暮らす高級アパートメントの修繕にあてられたり(p.137)、未成年者のための施設を作る財源が観光客向けのホテルの建設に使われたり(p.204)、子どもを出しに使ったような話もある。

マネーローダリングの温床となっている宗教事業団体(バチカン銀行)は、スキャンダルが発覚してから監視を強化したと言われている。だがそれをうまく逃れてわれ先にと他国へ大金を動かした名義人のリストを、捜査協力の協定を結んだにもかかわらず、バチカンは未だイタリア当局に提出していない(pp.48-9)。ラテラノ条約で定められている、教皇庁やその関係法人がイタリア国内で享受する特権については、その見直しが必要であろうと、COSEA のレポートが指摘している(pp.144-5)。

教会は腐敗とけっして無縁ではなかったことを歴史が教えてくれてはいるものの、その実態を探るのは簡単ではない。今こうしてバチカンの秘密が一つ一つ露にされつつあるところに、イタリアのジャーナリズムの凄さを見る思いである。

(元当館スタッフ)



【バチカンのサン・ピエトロ大聖堂】

映画「パンターニ／海賊と呼ばれたサイクリスト」上映のご紹介

山岳で圧倒的な強さを示したイタリア人レーサー、マルコ・パンターニの生涯を描いた映画が、関西でも上映中。

京都 京都みなみ会館 2月 1日～
兵庫 元町映画館 2月 13日～
大阪 109シネマズ箕面 2月 13日～

詳細は特設サイトでご確認下さい。
<http://www.pantani.euro-p.info/>

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>